

## 《浮世絵から写真へ～視覚の文明開化～》

印刷教育研究会  
副会長 大槻 辰弥

研究会では昨年(2015)の12月4日に、東京都江戸東京博物館にて「浮世絵から写真へ～視覚の文明開化～」の見学会を開催した。写真油絵技法が完成するまでの経緯と、その後の結末を見学記録としてまとめた。

フランスでダゲレオタイプが発明されたのは1839年であるが、日本に写真が渡来したのは1848年で、上野俊之丞(1790～1851)によりダゲレオタイプ用の機材一式が輸入された。

上野俊之丞は長崎の蘭学者で、江戸時代後期、科学技術導入に多大の貢献を果たした人物で、幕末・明治期の写真家上野彦馬の父でもある。それを機に、薩摩藩をはじめ諸藩で写真術研究が行われたが実用化には至らなかった。

日本で実用化された写真術は、1851年にイギリスで発明されたコロディオオン湿板法で、日本に伝えられたのは1857年頃とされている。

息子の上野彦馬は、化学を学ぶため海軍伝習所の付帯機関である医学伝習所<sup>くわじょう</sup>に入門し、津藩の堀江鋤次郎とともに写真術を研究し、津藩の令により堀江鋤次郎と「舎密局必携」という化学の教科書を執筆した。その第三巻末の付録に「撮影術ポトガラヒー」でコロディオオン湿板法について紹介している。その翌年の1862年には、長崎に「上野撮影局」を開設し数々の名士を撮影した。

一方、写真術は浮世絵の世界に多くの影響を与えた。そして、写真そっくりの表現を追求した肉筆画や浮世絵が大量に制作された。江戸時代末期から明治初期にかけて活躍した洋画家・浮世絵師、五姓田芳柳(1827～1892)の長女である、渡辺幽香<sup>ゆうこう</sup>(1856～1942)の作品は完成度が高いと感じた。

写真油絵とは、写真の上から彩色するのではなく、印画紙の表面の被膜を剥がしその裏から油絵の具によって彩色された写真を指す。

初代・鈴木真一は、陶磁器に写真を焼き付ける技術を開発した人物であるが、最初に写真油絵の研究を始めたのは二代目・鈴木真一である。

二代目・鈴木真一は、最新の写真術を学ぶため1879年秋にサンフランシスコに渡った。そこで見たこともない着彩写真に出会い、それを購入して帰国した。

鈴木が持ち帰った写真は、クリストレイム(Crystoleum)もしくはそれに類する技法と推測されている。クリストレイムは、1880年代～1890年代に欧米で用いられた技法で、湾曲した2枚のガラスを用意し、1枚のガラスには鶏卵紙を貼り付け裏から油絵具で着彩を施し、もう1枚のガラスには彩色のみを施し重ねて1枚とする技法である。

帰国後1年間余り研究を行うが上手くいかず、同じ下岡蓮杖<sup>しもおかれんじょう</sup>の門下で親交のあった横山松三郎(1838～1884)に見せたところ、横山も研究を始め1882年に写真油絵は完成した。

横山は択捉島に生まれ、函館にきたロシア人・初代領事ゴスケヴィッチから写真術と西洋画法を学んだ。その後江戸に渡り、下岡蓮杖に師事。1868年に写真館「通天楼」を開業。日光山や江戸城の撮影、壬申検査の記録など、明治政府に依頼され数々の仕事に従事した。後年、陸軍士官学校の教官になり、新たな写真技術の開発にあたった人物である。

写真油絵の技術は数名の弟子の伝授されており、そのなかの1人が小豆澤亮一<sup>あずさざわりょういち</sup>(1848～1890)である。

小豆澤亮一は、現在の松江市の豪商、小豆澤浅右衛門の長男。日本画を学んだ後、1885年に上京し、横山松三郎のもとで写真や油絵を学んだ。画家としての名は小豆澤碧湖<sup>へまきこ</sup>という。

小豆澤は横山亡き後、1885年7月1日に専売特許条例が施行されると8日後の7月9日にいち早く特許の出願を行い10月7日に取得した。特許期限は1900年10月6日までの15年間であった。小豆澤は写真油絵の技術を独占したが、5年後の1890年に亡くなり、写真油絵の技法は忘れ去られてしまった。

今回の展示は、告知通り『本流から置き去られてきた「愛すべき隙間の時代」にスポットを当てる画期的な試み』であり有意義な見学会であった。

# 《特別講演 画家の眼（見ると云うこと）》

公益社団法人二科会  
常務理事 松室 重親

（二科神奈川支部”支部たより”  
2015年10月号からの部分転載）

中島先生は心象を話されました。あのような画家の精神と言うのは、皆さんよく理解できると思います。自分も中島先生のファンで、こういう作家がこれから二科で活躍することを期待しています。二科会には多士済々の人達がいるのだから、二科会の中だけではなく固有名詞をのせて世界に船出して二科会の名を知らしめるのが本筋だと云う持論があり、二科会に何某在りと作品と作家を紹介して行くようになると思えます。

中島先生の作品を見ると、石を人体に克明に写しています。奥様を亡くされた衝撃を石に転化して永遠の愛を表しています。いつまでも変わらず、自分の愛情や喜怒哀楽の全てを石の母子像に思いを託していることが分かりました。

私は大学を卒業する時、「この中で絵描きになるのは、二人もいれば良い。」と先生に言われました。医学部を出ると医者になり建築科を出れば建築家になりますが、美術学校を出ている人間が全て絵描きになるわけではありません。結局、院展の吉澤照子と二人だけになってしまいました。平山郁夫は一年下で同じ釜の飯を食った仲間です。

短大で絵を教えたことがあります。「ものを見る」とは、目があるから見えるとは限りません。風景を描くにしても、空の青さ、風、鳥の声、たき火の匂いなど五感で感じなければ対象を捕まえることは出来ません。物体は空間を押しつけて存在しています。自分の方へ向かってくる量や、カミソリで剃ったように空間を切って逃げて行く面を感じながら描かないと立体というものとは掴めません。学生が石膏デッサンをしているとき「裏が見えない。裏が描けてない。」と先生に言われて困惑する場合があります。

しかし、中島先生が言う様に、「光と影が創造する一つの空間に物が存在する。」ということを確認し、経験や記憶を含めて判断することが大切です。

だから、絵は「何が描けたかではなく、本当は何が見えたか？」であります。そのプロセスの中で「何を感じながら描いたか？何を驚きながら描いたか？何を哀しみながら描いたか？何を不思議がって描いたか？どういう想いをしながら形に陰影をつけて行ったのか？」自分の想いが、感動が、喜びが、驚きが、哀しみが、全てがその絵の中に表現されていなければ人の心を打つことが出来ません。中島先生の言う通りです。

見るということの一つには、客観的に見るということがあります。客観と言うのは、自分の立ち位置から見て物を判断することです。触ってみたり、光を当ててみたり、逆に電気を消してみたり、縦から見たり、横から見たり、後ろから見たり、測って見たり、このようにして五感を駆使してものを見ることは物を認識する手段の一つです。

けれども、第六感というものがあります。女性は第六感が鋭いと言います。理由は分かりませんが確かにあります。絵描きは第六感を磨かないと、本当のものは見えませんし、捕えられませんし、表現できないと思えます。

皆さんも物を描くときに「何を描きたいか」「何に感動したか」というテーマがあります。モチーフも必要です。テーマは作家の思想・心情であり、モチーフはそれを表現するのに適した材料であり色です。

人間の死を表現する場合、単に死体を描いても表現できません。それを連想させるモチーフを選ぶことが重要です。例えば、画面の上に魚の骨を置いただけでも人間の生死を暗示させることが出来ます。海草の揺らめく海の中を泳いでいた魚が骨になって海岸に打ち上げられている所を描いただけでも、自分の持っている生死に関する思いを表現することが出来るでしょう。

織田廣喜先生は、支部展の批評で「絵には謎がないとつまらない。」とおっしゃったことがあります。織田先生は、12歳頃虎の掛け軸を見て「こんな絵が描けたらいいな。」と思い九州から東京に出て来たと言う人物です。キャンパスがないから麻袋を引きはがし木枠に貼り付けて絵具を塗って二科に出品したという話もしてました。美術雑誌に織田廣喜の肖像が載った時、浴衣ひとつでキャンパスの前に立っていた写真を覚えています。

織田先生はどこにいても女性を描いていました。「人物の顔はほんの一寸違っても上手く描けない。上手く描けないと夜も寝られなくなる。」と仰っていました。画面が大きくアトリエに絵が入らないので庭で絵を描いていました。顔が描けないとベッドの上で早く明るくならないかと陽が昇るのを待って描いていました。これほど、絵に対する思いが強い方で、あの年齢であの知名度で何不自由ない先生が、一番苦労していたのは「自分の思った顔が描けない」と

ということで、絵具を手でかき回して絵に指紋が付いているところがあるくらい四苦八苦していました。

若い時から、画商さんとかデパートとか個展とか、絵描きになるために皆さんがやる様々な方法はとらないで、ただひたすら描いて毎年二科に出品していました。リラさんと結婚されてからも食うや食わずの生活でしたが、少しずつその魅力が認められて大作家になりました。誰にも真似のできない作品で、ピカソの絵を真似したら大げがをすと言われていいますがそれと同様です。

誰にも真似のできない作品を描く、それが個性というものだと中島先生は仰っていました。上手く描けないから皆さん必死になって描きます。そして、形が崩れてしまったり、色が濁って来たり、自分で分からなくなり泣きながらも描いて、縋り付いて描いて消してまた描くうちに、チラッと良いところが出てきます。夢中で描いているとその人にしかないキラリとした美しい何か良いものがのぞくことがあります。先輩とか先生はそれをいち早く見つけて引っ張り出してあげるべきで、その延長線上に個性があります。これはもう人間の顔や生い立ちや性別や年齢が違う様に、誰とも違うその人のみのもので真似も出来ないし真似する意味もないものです。それが個性です。人と違う物を描こうとか、めずらしいものを書いて見ても、決して個性が生まれるものではありません。

ル・コルビュジエは、文明社会と新しい芸術について「君たちの周囲を眺めてみたまえ。殆ど直角、直線で、垂直水平の線の中で君たちは生活している。原始時代の様に不定型な形の中で暮らしている場合と異なる。現代美術が幾何学的なものになっても不思議ではない。」と言いました。

現在は、電子顕微鏡やコンピュータによる画像解析で、肉眼では見ることの出来なかった形や空間が具体的に映像化されます。人間は未知の映像や形に魅力を感じ、それをヒントに新しい仕事をしてみたいと感じると思います。

シュールレアリズムが出てきたときの宣言があり、「手術台の上でこうもり傘とマシンが遭遇した様な美しさ。」という妙な詩が発表されました。

現実にはありえないことが現れると好奇心が働き、疑問や驚きが人の心を惹きます。人間は、美しい花や綺麗な女性を見ると感動します。これは心の動きです。今まで見たことのない様なものを提示され、驚いたり不思議がったりするのも心の動きです。

シュールレアリズムを見て心を動かされるのだから、芸術と云っても差し支えないという論を展開し

ました。

絵とはどういうものを定義するのは難しいものです。芸術というのは、人間の精神や人間の心のための営みで、人間として大事な美の表現です。学生時代には、工芸は芸術の中に入るか否か、実際に用立てるものが純粋な芸術と言えるかと論争もしました。

モデルを描いたときモデルに似ていないことがあります。正確に描けば似て来るはずですが、そのまま写したってそれも絵ですが、自分がこう見えたという100人が描くと100人それぞれ感性やものの見え方の違いが現れます。

原始人が描いたアルタミラやラスコーの壁画が残っています。牛や鹿がどうして見事に描いているのでしょうか。獲物を捕らえるのに人々は命がけでした。全ての形を把握する洞察力がありました。祈りや記録、自慢と言った意味もあるかもしれません。焚火の墨を使って描いたり、草の汁などから絵の具を作って描いていました。人間は生まれたときから形を描いていくという本能を持ちます。絵描きは、絵を描くことの意味や価値を探って行きます。

音楽は、情報を知らせるために打楽器を使っていましたが、リズムや楽器が進化して今の様な感動的で美しい表現が生まれたと思います。文学は語り部がいて、昔の記憶を伝えたり粉飾して色々な面白い話を創ったことが原点だと思います。人間は二足歩行により手が使えるようになり、装飾に好奇心を持ちました。飾ると言うことは、人間の一つの本能と言っていいでしょう。武器にまで装飾をします。絵を描くのも本能の様なものです。

二科展の壁には色々な作品が並んでいます。絵を描いている時は孤独ですが、作品が出来て二科展に展示されれば10万人の人が見てくれる喜びは、何ものにも代えがたいものです。

年齢、性別に関係ありません。子供の絵も面白く、自分の心が素直に出れば皆に感動を与えられます。一生に一枚でも良いから美術史に残るような作品を描きたいと思うのが普通だと思います。

ところが、「絵は目的ではない。」と言われて迷ったことがあります。王貞治は記録を出しましたが、技術や力だけではなくバットを振って振りまくる内に、何時の間にか偉大な人生観も出来上がって来たと思います。

絵も沢山描いているうちに、それが人間完成の手段ともなります。絵を手段として人間完成への道のりを歩んでもらいたいものです。自分の人生を充足していくために絵を選んで良かったと思ってくれたら幸甚の至りです。

# ＊研究会のご案内＊

この度、印刷教育研究会では、版画を作る会 講師 飯田 琳也 氏をお招きして、「版画と印刷文化」、についてご講演いただくことになりました。

会員ならびに賛助会員の皆様をはじめ、関係各校の在校生・卒業生の皆様のご参加をお待ちしておりますので、よろしくお願ひ申し上げます。

## テーマ：「版画と印刷文化」

### 主な内容

- ◆木版画
- ◆創作版画
- ◆木版画に必要な道具、材料等
  - ・ 版木
  - ・ 刀
  - ・ 和紙
  - ・ 絵具、バレン、刷毛
- ◆摺りの実演

講 師：版画を作る会 飯田 琳也 氏

日 時：平成 28 年 2 月 29 日（月） 18 時 30 分～ 20 時 00 分

会 場：都立工芸高等学校 1F 会議室

参加費：無料

申込先：HP のお問い合わせフォームより、「2 月の研究会参加希望」とお申込みください。

### ～創作版画について～

木版画は仏教の伝来と共に中国より朝鮮を経て日本に入り、日本特有の文化の中で、道具、材料等が改良され、良質で安い作品が作られるようになりました。そして、江戸時代になると錦絵として繁栄を極めました。

錦絵は絵師・彫師・摺り師の共同作品でありましたが、時代の変化により錦絵が衰退していくと、仕事の量が減少し絵師・彫師・摺り師の分業を維持することが難しくなりました。

そのため、今日ではこれに代わって自画・自刻・自摺りの創作版画が作られるようになり、版画の種類も木版・銅版・石版・型紙版などがあります。

印刷教育研究会では、正会員、賛助会員を募集しております。

- ・ 正会員（主に印刷関連の教育機関等で教育に携わる者）会費 年間 2,000 円
- ・ 賛助会員（本会の趣旨に賛同する法人及び団体・個人）会費 1 口年間 10,000 円（1 口以上）

会員は、当研究会主催の研究会・見学会に無料で参加いただけるほか、一般財団法人 印刷図書館を無料でご利用になれます。多数の入会の賜りたく、お願ひ申し上げます。